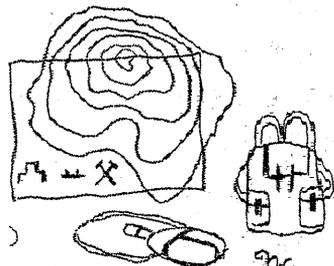


| 土地利用形態 | 地形面 | |
|--------|---------------------|-------------------|
| 集落 | 段丘面、丘陵及び山麓緩斜面、丘陵平坦面 | |
| 耕地 | 一毛作 | 侵蝕谷 |
| | 二毛作 | 氾濫原、低位段丘面 |
| | 普通畑 | 段丘面、低位及び丘陵緩斜面 |
| | 畑兼園 | 段丘面、山麓及び丘陵緩斜面、氾濫原 |
| | 茶栗樹 | 段丘面 |
| 林地 | 山地、丘陵地、段丘面 | |

以上のことから、耕地集落は高度傾斜ともに小さい段丘面、山麓及び丘陵緩斜面に分布し、水田は特に水利のよい侵蝕谷又は氾濫原などに発達し高燥な台地には少ない。林地は、調査地域内においては、高度傾斜いずれにも左右されず、山地丘陵地平地のいずれにも分布している。

巡 検 記

富 山 (昭和34年9月3日-5日)



昭和32年度生

この巡検が行われたのは、式先生がお茶大へいらしてからまだ半年もたない頃であった。先生は、なにしろ初めてのことで夏休み前から大変なハリキリようで、私共も下調べに休暇返上を余儀なくさせられてしまったが、この勤勉ぶりは、はからずも厚生課の某氏を地理科のファンにさせてしまう作用を果たした。

オ一日目は、黒部川扇状地の地形と流水客土状況を見学することが主目的であったが、時間的都合で午前の一部を魚津の埋没林博物館で過ごした。ここには、昭和5年の魚津港修築の際に海底より発見された巨大な樹木(主として根株)が保存されている。これらの埋没株については、5千年から一万年くらい前に片貝川の沖積平野に累積していたのが、地盤沈降で水につかたため腐って流れ去り、根株のみが残って現在に至ったと考えられている。

博物館には、引き上げられてきて陳列されているものもあるが、発見箇所には建物を備え付けた結果、発見当時のままの姿で海中に保存されているものもある。例えば、自然保存館では、25cm×15cmぐらいのプール一面に、根株が網の目のごとく張りめぐっているのを見ることが出来る。特にプールの側面からガラス越しに見ると、手前に迫ってくるような量感があり、埋没前の森林がいかに大規模なものであつたかが想像される。

博物館を辞して駅へ向う途中、火災注意報を放送しているどこかの宣伝カーに出会った。目ぬき通りの建物のうち、担当教がまだ新しいところをみると、魚津も最近フェーンによる大火災をこうもつたようである。

三日市の流水客土事務所では、所長さんから延々とお講義があつた。要約すれば、「黒部川扇状地の水稲の反当収量が富山県で最低にランクされているのは、黒部川の水が全周まきに見える低温であることと、耕土が砂質で河水の透過が速いことの二因に起因しているので、この打開策として当客土上を行うことが考えられ、ここでは特に扇状地の自然に傾斜する放射状の灌漑用水路を利用して、扇頂附近より流水をもつて客土する方法がとられている」といった具合である。

昼食後、何はともあれ、客土の採土現場を見物に出かけた。残念なことに、9月はまだ水田使用中であるため、客土作業は中止されていたが、赤土を露出した山肌や、石のゴロゴロした泥水の流れた跡などから、冬期の作業ぶりを推し測ることが出来た。

採土地見学後は、引き続きジープで扇状地を一周した。ここの地形の特色は、山際に隆起扇状地が見られること、海岸線近くに砂丘と後背湿地が見られること、などである。砂丘の傾斜をハンドルベルで測つてみたり、扇状地の微かな凹凸を求めて各所でホーリングを行なつたりしたため、丸首シャツ姿の御老体の運転手さんには少々退屈の御様子だったが、それでも夕刻より降りだしたドシャブリの雨の中を宿舎までお付き合い下さつた。なお、宿舎を早奈月に求めたのは、私共に落ちついた温泉気分を味わわせてあげたい、という先生の御親切なる御配慮の賜である。念のため、翌朝は、黒部峡谷のトロツコに大いに後髪を引かれながら、砺波へ向つた。車中で誰かが買った新聞に、私共が「視察に赤る」との記事があつたので、一同面はゆい限りだったが、砺波という所はよっぽど事件のタネに事欠いているとみえる。

市役所では、先生が記者会見などなさつていらっしゃる間、私共には二人の課長さんが交替で講義をなさつた。砺波といえは散村で有名であるが、地元の人にとっては見なれたことなので、か之つて、この散村地帯に最近敷い

た水道施設について宣伝なさっていた。地形が扇状地性で自然傾斜しているため動力費は他より安くつくが、散村のため規模の割に利用者が少ないのが欠点とのことである。

砺波平野は役所さしまわりのバスで一周した。まわ高台から散居形態を見下してみた。屋敷森を配した家々が美々と散在し、全く教科書通りである。新しく家を建てる際は、現在でも離して建るとのことで、散村をなした最初の要因が何であつたとしても、伝統の根強さには驚くべきものがある。後で土地の名士である助役さんの家を見せてもらったが、ノミ置もある広間をはじめとして、太く黒光りする大黒柱や巾ノ死以上もある一枚板のなげしなど、昔の家は大変な貴族を備えていることがわかった。

庄川の端の料亭で川アユの御馳走になつた後、チューリップ栽培試験所に寄つた。富山県では裏作物としてチューリップ栽培がさかんで、外貨の獲得に大いに役立っている。たゞ球根を作るのが目的であるため、花が咲くとすぐ茎を残して花だけ切り取ってしまうそうで、何だかもつたいない気がする。

三日目は河岸段丘を見に常願寺川の上流へ向つた。段丘は大きく二段に分かれるが、赤松ヶ原塔岩台地のすぐ下にある粟栗野附近で、高さ100mほどの堆積段丘が見られるのは、ちよつとした驚異である。この砂礫よりなる段丘面は、上に登ってみると辺り一面赤土で、余々に畑が開かれつゝあつた。農家で水はひ飲ませてもらい、正午頃現地解散したが、その後立山へ出かけた者もあつた。

宇都宮 (昭和35年9月6日-9日)

昭和33年度生

朝9時52分の汽車に乗るのは夏休みですっかりナマツた体に少々キツかつたのですが、とにかく全真車中の人となりました。名にし負う式先生の巡検に大きな期待を持って上野を後にしたわけです。もちろん「まだ反響は夏休みだというのに」なんて口にする不心得者はいませんでした。(?)

宇都宮駅には式先生がお待ちでした。時刻は10時50分、そこで勇んで出発する前にすませねばならないことがありました。余っている時間はありませんから急がねばなりません。突然10数人のキリツと勇ましい、見方によつては異様な風体の女性達が入つて来たので食堂のおばさんはさぞ驚いた